

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 7章9～17節

⁹この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、¹⁰大声でこう叫んだ。

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、
小羊とのものである。」

¹¹また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹²こう言った。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、
誉れ、力、威力が、
世々限りなくわたしたちの神にありますように、
アーメン。」

¹³すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」¹⁴そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」

¹⁵それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、

昼も夜もその神殿で神に仕える。
玉座に座っておられる方が、
この者たちの上に幕屋を張る。

¹⁶彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、

太陽も、どのような暑さも、
彼らを襲うことはない。

¹⁷玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、

命の水の泉へ導き、
神が彼らの目から涙をことごとく
ぬぐわれるからである。」

【福音書日課】マタイによる福音書 25章1～13節

¹「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。²そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。³愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。⁴賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。⁵ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでし

まった。⁶真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。⁷そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。⁸愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』⁹賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』¹⁰愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。¹¹その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。¹²しかし主人は、『はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。¹³だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。』

皆、眠り…【こども説教のために】

わたしたちの教会が年に一度、死者を記念する「在天会員記念礼拝」に、皆さんをお迎えしました。教会によっては、「永眠者記念礼拝」あるいは「召天者記念礼拝」などと呼ぶこともある記念礼拝です。教会は古くから、11月の初めに「死者を記念」してきました。

人の死は、悲しいことです。家族や親しい人の死は、わたしたちの心を深く傷つけることがあります。今まで言葉を交わし、手を握り合い、身体の温もりを感じ合えていた人が、沈黙し、握り返してこなくなり、冷たくなるのです。夜、寝床で眠るよりももっと深い、覚めることのない永遠の眠りに就いてしまうかのようです。

主イエスの時代にも、人は皆死んだら永遠の眠りに就く、と考えている人が多かったようです。身体は葬られて土に還り、そこで人は皆、永い眠りに就くのです。そして、いつか「終わりの日」が来て、起こされます。神の前に立たされて、生きていたときにしてきたすべてのこと、善いことも悪いことも明らかにされて、裁かれる、と考えられていたのです。

主イエスは、「十人のおとめのたとえ」で、眠っていた者が起こされるのは、花婿を迎えて、婚宴の祝いに加わるためだとお教えになりました。眠ることなく目覚めたまま花婿を迎えられれば良いかもしれませんが、皆、眠ってしまうのです。人は皆、「死」という眠りに就くのです。けれども、起こされるときが訪れます。そのとき、キリストをお迎えし、祝いの宴に加えられるのです。神のお開きくださる「天の国の宴会」にあずかるのです。

その「天の国の宴会」は、すでにわたしたちの間で始まっていると、主イエスはお教えになりました。生きている者も、死んだ者も、ひとつの「天の国の宴会」に招かれているのです。生きている者も死んだ者も、共にひとつの喜びの祝いにあずかるところが、「天の国」なのです。

白い衣を着た者たち

わたしたちは、今年も「死者を記念」する礼拝に集ってまいりました。この記念礼拝のご案内を差上げた関係ご遺族も、ご来堂くださっています。コロナ禍前は、多くの関係ご遺族がお集まりくださり、礼拝堂にあふれるほどになったこともありましたが、コロナ禍以来、ここに実際にお集まりくださる方は限られるようになりました。オンラインで礼拝に加わっていただけるようにご案内していることもあります。そうでなくても、コロナ禍以降、人の集まり方は大きく変わりました。特に葬儀などの集まりは、以前と比べてとても小さく営まれるようになりました。義理やおつき合いで参列する必要はない、と考えられるようになったのでしょうか。死者の記念は、ごく近い身内の者たちだけで、できるだけ小さく営めばよい、というのです。教会の「死者を記念する礼拝」も例外ではないようです。教会員の皆さんでさえ、そのようにお考えになられている方が少なくないでしょう。それが時代の趨勢であるということならば、抗いがたいことなのかもしれません。

けれども、敢えて申し上げるならば、教会は「死者を記念する」ために皆さんにもっと多くお集まりいただきたいのです。それも、黒い喪服に身を包んで、悲しみや嘆きを癒すためだけでなく、死者と共にあることを喜び祝うために、できれば喜びを表す明るい服を着て、お集まりいただきたいのです。

礼拝堂の聖壇の装いを、今日は白色といたしました。神のご栄光のもとにある喜びを表しています。牧師は白いガウンを身に着けようかと考えましたが、先人に倣って、通常通りの黒いガウンといたしました。それでもガウンに掛けるストールは白色です。

「僕ヨハネ」は、「ヨハネの黙示録」に天上で見てきた幻を記しました。彼は見たのです、地上の生涯を終えた数えきれないほど多くの人々が、白い衣を身に着けて、神の玉座の前、小羊キリストの前に立って、讃美の礼拝をしている様子を。その人々は、「**大きな苦難を通して来た者たち**」です。地上の苦しみ多い人生を通り抜け、今やその生涯を終えて、その身体を土の塵に還し、人々の前では永い眠りに就いたと見られていた者たちです。

彼らは、しかし、眠りに就いたままではありませんでした。天上で、すでに起こされ、眠りから覚め、白い衣を身に着けて、神の御前に立っているのです。裁きを受けるためではありません。神を讃美する天使たち、長老たちの群れに加わるためです。

ヨハネは、この大群衆が白い衣を身に着けて、神を讃美する礼拝に加わることができているのは、**その衣を小羊の血で洗って白くした**からだ気づかされます。この人々を裁きの座の前ではなく、神を讃美する礼拝の群れに加えられるようにしてくださったのは、キリストだと気づかされたのです。

油の用意を！

「在天会員・教会墓地埋葬者・逝去者名簿」を更新いたしました。一年間に、教会員4名、教会員家族1名、元牧師2名をここに加えさせていただきました。合わせて165名のお名前が記されています。

もちろん、わたしたちは、ここに名が記されている方々だけを記念しているわけではありません。ここに、わたしたちが知るすべての方の名を加えたいのです。共に憶えたいのです。ただ家族・身内であった者だけでなく、わたしたちと関りのあったすべての方々を記念すべき方として憶えたいのです。そして、わたしたち自身がいずれここに加えられるべき一人ひとりであることを確かめたいのです。白い衣を身に着けた、だれにも数えきれないほどの大群衆の中に、すべての者が加えられるべきことを、憶え合いたいのです。

今回、ご案内を差し上げた方の出欠返信ハガキの一つに、こういう言葉が書き添えられていました。教会で記念されている方の子で、ご自分の亡き妹弟は、かつて子どもの頃に熱心に教会学校に通っていたが、彼らは信者のように記念されることはないのでしょうか、と。

わたしたちは、教会員信者だけでなく、この名簿に、そのご家族の名をも加えさせていただいています。教会としてご葬儀を執り行わせていただいた方はもちろん、そうでなくてもお申し出があった場合に、教会員家族として、同じように名を記させていただいているのです。そうしない教会もあるかもしれませんが、わたしたちは、そうしています。そうすることが、主イエスのお考え、弟子たちの考えに沿ったものだと考えるからです。

「十人のおとめ」のたとえで、主イエスは、おとめたちが皆、花婿の到着を待ち切れずに眠り込んでしまった、とお語りになりました。主イエスの願いは、目を覚まして待つことができる者になることです。けれども、ほとんどの者は、目を覚まし続けていることができません。だれか寝ずの番をしてくれていると思えば、安心して眠りに落ちてしまう者もあるでしょう。仕方のないことです。だからと言って、主イエスは、そのような者をお見捨てにはなりません。目を覚まし続けていた者が一人いれば、そのときに眠り込んでいた者たちを起こすことはできるのです。花婿を迎えに行かせることはできるのです。

ただ、眠りに落ちてしまうおとめたちに、油の用意をさせましょう。そのときに慌てさせないように、今から、油を持たせておけば良いのです。わたしたちが一人ひとりに、油を手渡しておけば良いのです。その使い道を今は分からずとも、そのときには、お分かりになるでしょう。

わたしたちも皆、先達から託された油を持たされているのです。記念礼拝を通して、わたしたちは、この油を一人でも多くの方にお渡ししたいのです。